

## 『希望の哲学』

O・F・ボルノウ著

小島威彦訳

新紀元社

著者ボルノウは、一九〇三年にドイツに生まれた哲学者・教育学者で、彼の哲学はデイルタイの生の哲学とハイデッガーの実存哲学に源泉をもち、現在では、彼独自の哲学的人間学を背景にして教育学を考究している、現代を代表するユニークな思想家の一人と思われる。

『希望の哲学』は、一九五九年の晩夏にボルノウが日本を訪問した際に、諸大学の講演用のために編集されたものである。講演用かつ彼の初期の著に相当するので、かなり非体系的である。が、彼の根本思想が十分に成熟・分化していない

状態でほとんど全て表現されていると思う。従って、この本について語る事は、ボルノウ哲学全体を語ることであり、とても私の任ではない。この本と出会うまで哲学は超観念論であると偏見を抱き読まず、近代精神史、哲学史の知識も皆無に等しい私である。だから全く個人的・現存在的な閉じられた視点でこの著の紹介・感想文に終始する危惧を感じる。ともかく私には生き方にかんがりの影響を与え、生涯忘れられない本の一冊となりつつある。

まず、構成としては、“希望”“人間と

空間”“信頼”“実存主義克服の問題”“理性と非条理”“人間と技術”“平和とは何ぞや”と続いている。各章は、ボルノウ哲学に各方面から違う色のスポットライトを当てたようなもので、部分と全体が密接に、有機的に相互関連している。部分が柱となり、本全体が、一軒の“家”のような空間を形成している本であると感ずる。そして、全体を貫通する二つの大きな流れ——“希望の人生に対する積極的な意味づけを新たに人間学的観点から確立”と“実存哲学の克服”が各章で具体的に述べられ深められている。部分と全体が相互循環的に理解を深めていく。

しかし、哲学書としては、比較的平易な文章でありながら、読み込むほどに底知れぬ内容の深さと重厚さがあり、私とこの書との大きな隔たりを見る。それは、一つには随所で、リルケ、ゲーテ、サンテグジュペリなどの詩人、作家達の作品を引用することで、ボルノウの直観

が働き、理論的叙述が展開するからではないか。感性に直接訴える表現が実に多いのだ。知性のみでボルノウの哲学を理解するには限界がある。読む方も直観と感性を大いに働かせ、自己内省をする。しかも、人間を越えた絶対的存在―特定の宗派の神ではなく―を信ずる境地なくしては、『希望の哲学』は彼岸にあると考える。つまり、即役立つ知識を期待しても無理なのであって、科学的・理論的思考のみでは、ボルノウの哲学の評価は低いかもしれない。一冊の本を、一人の人間と対話するように読む。人間らしい読み方、自由に、自然に読む。『希望の哲学』にはこれらのことが要求されている。しかし、時を急ぐ現代人には、それがむずかしいのではないか。『希望の哲学』の難解さは、読み手の人間性喪失の進度に相関しているのかも……。

第二点として私が考えることは、ボルノウ自らが、常に自己の内面深く潜む実存的孤独・不安と闘い続けていることだ。ニヒリズム、虚無主義などの実存主

義的表現は、私たちの日本人にも身近ではあるが、そんなものの比ではない想像を絶する暗い底知れぬ気分なのだろう。その中で一節の光を求めるところで「希望の、生の哲学」を人間の本質として生み出していく。単純に、ロマン主義・理想主義のもとに一方的に書かれた他の書とは厳然と違うのだ。だから実存的不安や絶望、死への恐怖の体験をくぐりぬけた思想家としてボルノウを把握することなくしては、結局、何も語れないのではないか。しかし、現在の私には本質的に実存主義の体験は不可解だ。だから、希望が、信頼がどれほど人間らしく生きるのに必要なかを胸にグサリと来る迫切感を感じられない。そこには越えられぬ壁があると思う。けれども、戦中・戦後の動乱の時期を体験せずとも、高度成長・著しい欧米的近代化の中に育った私の内面には、虚無的な漠然とした不安があると感じる。ボルノウが一九五五年当時直面した精神的荒廢は現代にも綿々と続いているとしたら、各自が、内面的虚無・

不安などと対決しながら読まずしては、ボルノウに迫れないのではないか。しかし実際の緊張を伴う苦しい作業である。日常怠惰な雰囲気暮らしには、困難な事であった。以上の事は、一般的には表面的に思想を吸収しながらも依然として、日本固有の文化伝統に暮らし日本人が、あちらの思想書を読む際に直面する問題点に通ずると思うのだが。少々我流に傾きすぎたので、次に及ばずながら、この著の内容について、ボルノウの考えと私見を簡単に述べてみたいと思う。

ボルノウは、『希望』の部分で「希望の機能を正しく基礎づけることができて初めて、実存主義をその固有の核心に逆登って克服しうる展望が開ける。そして希望は特に重要な哲学の対象である。」と『希望の哲学』の目的の一つを明確にしている。しかしボルノウの希望は言語で明確にされない。「特定の対象をもたず、経験的に確かめたり打ち消したりできる個々との小さな希望を越えたところにある人間存在を究極的に支える地平線であ

る。それは生存に対する信頼であり、「希望は人生を人としてつまり未来をめざす行為と努力として、初めて可能になる。」さらに、ボルノウは、希望を時間論の中に展開する。「希望は未来に対する或る特定の態度である。人間の生の時間的構成は根源的には希望によって決定されるものである。」このように、ボルノウ哲学の特色の一つとして、神学の対象ともなる信頼・感謝・希望などの徳を統一体として、過去・現在・未来に対応する時間論の中で追究していく方向がある。空間論にも共通するが、物理的・数学的時間・空間でなく、具体的に人間の体験の中に呈示される時間・空間を、主観的にそのまま問題にしている。決して一般的に測れない人間の内的時間・空間であり、心理状態により大いに变化するものなのである。一見、非科学的な論に思えるが、合理を越えた生きた人間の時間・空間を的確に把握している。希望は、実際に「アルキメデスの点」である。自分の内と外の世界をあるがままに直観的に感じること

ができない大人の世界には、異質の時間論、空間論があるだろう。けれども、子どもにとっての体験的時間・空間は、かなりボルノウの考えに近いと思える。もちろんボルノウは児童学者ではない。がこのことから生きた人間の体験に深く沈潜してその本質・根源を考える一つの学問の流れと、子どもから学ぶ一つの流れが、「人間を考える点では共通しているのではないかと考える。どうだろうか。」

さらに「家」を内的空間として、家の建設を人生の建設に考える「空間とは何か」の章も、子どものおうちづくりの遊びを考えると興味深い。だが何故、ボルノウの視点が（私の勝手ながら）幼児にまで広げられるのか。考えるべき問題と思う。これに関して特に「信頼」の章がその鍵を与えているのではないか。ここでは、信頼の喪失、人間相互に潜む不信に満ちた当時のドイツの状況の中で、新たな信頼関係を生ずるために信頼の本質を厳しく見極める意図で述べられている。まず日常使用される信頼とそれに類

似する用語の意味を掘り下げる。次に、母と幼い子を中心とする「まどい」の世界に人間の信頼関係の本質・原理を追求する。ボルノウは母と子の世界に注目している。「子どもは母（特定の個人）に対する信頼が母とのまどいの中で充分育つ後に、現在を、未来を支える世界全体に対する信頼をもちうる。」ボルノウが人間を支えるとする信頼・希望は母と子の世界の中で芽生え育つのだ。このように子どもの世界に人間の根源を見い出そうとするボルノウの立場は児童学に共通する面があるのではないか。また幼き弱き存在を大切に愛し見つめるボルノウの人間性も、彼の哲学の大きな背景を感じる。さらに次の言葉は直撃かつ辛辣だ。「信頼には常に冒険・賭けという意味が含まれている。自分を賭けることは信頼の最も深い本質の一契機として、きつてもきれない。信頼の確からしさは、自らを信ずる、心を無条件に傾け尽くすことに基づいている。」「教育者は信頼の義務をもっている。」私は、この言葉が観念的

なものではなく、教育者としてのボルノウの長く地味で真剣な教育体験の中から生まれた珠玉の言葉であると感じる。

思わず「自分は冒険をするだけの勇氣があるだろうか」と問わずにおれない。自己反省を迫るボルノウの鋭く厳しい言葉はこの著には多い。それはボルノウ自身への問いかけだと思える。最近のボルノウの著に教育学関係の本が多いが、これは、自らの生活実践の中に論を展開、深めていく態度を反映していると考えられる。具体的に体験の記載はなくとも子どもに係わる私たちが学ぶ点が多い『希望の哲学』である。

だからこそ、ボルノウ哲学は、私たちが日常の子どもとの生活の過程で希望、信頼、空間などの諸テーマを行為を伴い追究、思索することで本当に理解し評価できる。そして再度読み直すときまた別の面が見えるおもしろさがこの本にあると思う。しかしボルノウは本当の信頼や希望は「決して意志の力では得られず一つ

の「恵み」であり、努力する行為によつてのみ近づける。」と常に断言する。確かに信頼や希望を得るための明確な方法などないのだ。それなのに、それ以上のものを求める現代は、自らを賭けて希望・信頼を求める努力を行為を忘れているのだ。「安易に母子関係における信頼の欠如」などと暴言するべきではない。信頼や希望は恵みなのだから、また、エリックソンも心理学的に信頼・希望・空間を扱っているので比較するのも興味深い。

残りの各章では、現代社会のかかえる急速な近代化に伴う精神的問題に、ボルノウの哲学的人間の観点から一つの解決方向を示している。それはまず個人との内面の充実が始まる時間を必要とする方向だが、子どもも含んだ人類の幸福の方向と思う。

読み終わり本を閉じると、目の前に彷彿とボルノウの姿を感じさせる『希望の哲学』は、ボルノウその人と言えるだろう。冷静・客観的かつ情熱的、専門性は

問わず、「自分が生きる」問題に直面した時に、一読の価値が大いにあると思われる。  
(矢部ひろみ)

